

音楽映像メディア (CD&DVD)

山崎 浩太郎

・新譜の発売点数

日本レコード協会のサイト掲載の「新譜数推移」(<https://www.riaj.or.jp/f/data/others/sp.html>)の2025年の項によると、所属の正会員、準会員、賛助会員計66社の2024年発売の新譜のなかで、クラシック音楽は12cmCDの邦盤4,397のうち58、洋盤2,164のうち646、合計すると6,561のうち704で、全体の約10%を占めた。2024年は6,502のうち852と約13%だったので、新譜点数も全体に占める割合も減少したが、2023年とはほぼ同じなので、点数も割合も、このあたりが現代日本の音楽業界におけるクラシックの12cmCDの平均値なのだろう。

またレコード店のHMV&BOOKS onlineのサイトでは、2025年のCD、SACD、DVD、ブルーレイ・ディスク、LPの発売数を見ることができる(https://www.hmv.co.jp/search/adv_1/genre_VARIOUS_700/keyword_the/year_2025/)。HMVが取り扱っていないディスクもあるので概数となるが、クラシックの総数は約4,440。うち国内盤は約1,050で、輸入盤がその3.2倍の約3,380となる。そのうちCD約3,380、SACD約250、DVD約80、ブルーレイ・ディスク約78、LP約190。総数は昨年在約5,600だったので、約2割減少した。

・日本のアーティストのCD

レコード店のタワーレコードのサイトにある「2025年タワーレコード クラシカル年間TOP40」(<https://tower.jp/article/campaign/2025/12/05/04?kid=plkpcmtmp02>)を見ると、2025年に人気のあったクラシックCDがどんなものか、概要を知ることができる。

国内盤の「クラシック 話題盤 TOP10」では、角野隼斗が2年連続で1位を獲得し、その人気ぶりを見せつけた。1位を得たのはブルーレイ・ディスクの「ピアノ・リサイタル at 日本武道館」(SONY Classical)で、クラシックのピアニストが13,000人のファンでこの会場を満席にした2024年のリサイタルの記録映像だ。構成にも選曲にも映像にも工夫をこらして、会場のファンもディスクの視聴者も楽しませようという精神が徹底しており、新時代のピアニスト像の一つを見ることができる。

ピアニストでは、辻井伸行の名門ドイツ・グラモフォン・レーベルからのデビュー・アルバム、ベートーヴェンのピ

アノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》他の1枚も6位に入った。また角野に続くYouTuberピアニストとして人気を集める「たくおん」こと石井琢磨の、ハンスイェルク・シェレンベルガー指揮のベルリン交響楽団と共演した「シューマン・ザ・ベスト」(SONY Classical)が4位となり、ピアニスト人気は「音楽・映像メディア」分野でも熱い広がりを見せている。

指揮者では、2位にサイトウ・キネン・オーケストラとの「ブラームス：交響曲第1番&第2番」(Decca)、10位に京都市交響楽団との「R.シュトラウス：交響詩《英雄の生涯》」(日本コロムビア)の2点が入った沖澤のどかの存在が突出している。女性指揮者がこれだけの人気を集めるのは素晴らしいことだし、今後も性別の枠にとらわれない、国際的な活躍を期待させる。

また指揮者で目をひくのは、7位に山本直純が新日本フィルハーモニー交響楽団を指揮した1972~2000年のライブ録音集5枚組(Tobu Recordings)がランクインしたこと。ベートーヴェンの《合唱》やブラームスの交響曲第1番を聴けることで、シリアスなクラシックの指揮者としては正當に評価されにくかった山本直純の再評価のきっかけになりそうなセットが人気を集めたのは嬉しい。同様に昭和を中心に活躍した音楽家では、生誕100年を迎えた芥川也寸志の作品や指揮によるディスクが登場したのも、2025年のトピックだった。

タワーレコードのリストには入っていないが、大物のセットでは2024年に没した小澤征爾の商業録音のほぼすべてを集大成した「小澤征爾エディション」(ユニバーサルミュージック)も話題となった。レーベルの枠を超え、放送用の初登場音源も加えたCD238枚組、税込25万円という破格のボックスは、日本では小澤征爾にしか実現できない規模だろう。

・海外のアーティストのCD

タワーレコードのサイト内「クラシック輸入盤TOP40」で1位を獲得したのは、2度の来日公演でも話題をさらった指揮者のクラウス・マケラによる、パリ管弦楽団とのベルリオーズの幻想交響曲(Decca)。ほかにロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団とのマーラーの《千人の交響曲》も11月に国内盤で発売された。海外では配信のみの録音を、日

本と韓国だけではディスク化する現象も興味深い。

輸入盤では、国内盤の男性ピアニスト人気と照応するように、2位にアリス=紗良・オット (DG)、3位に小林愛実 (ワーナー)、4位にユジャ・ワン (DG) と女性ピアニストが上位を占めた。なお、ユジャのディスクはアンドリス・ネルソンス指揮のボストン交響楽団と共演したショスタコーヴィチのピアノ協奏曲集だが、このほかにこの録音を含めてショスタコーヴィチの交響曲全集と協奏曲集をまとめたネルソンス指揮ボストン響による19枚組のボックス (DG) も、枚数に比して低価格で発売され、TOP40に入らなかったとはいえ話題を集めた。ネルソンスは9位のボストン響とのメシアンのトゥランガリーラ交響曲など複数の新譜が好調で、メジャー・レーベルでのメジャー・オーケストラの新録音や映像が少なくなった現代において、ひとり気を吐く存在となっている。

・キングインターナショナルの営業終了

2025年の「音楽・映像メディア」界の話題としては、ディスクのディストリビューター、キングインターナショナルの営業終了も忘れてはならない。

キングレコードの子会社として1995年に設立された同社は、ハルモニア・ムンディやオルフェオ、BIS、アリア・ヴォックス、ヘンスラー、ベルリン・フィル自主レーベルなど、多数の海外レーベルの輸入卸に加えて、アルトゥスやオーパス蔵など日本のさまざまなマイナー・レーベルも配給し、潤沢に流通させた。輸入盤に日本語解説をつけた国内盤化も積極的に行ない、音楽之友社主催の「レコード・アカデミー賞」でも多くのディスクが受賞の栄に浴してきた。その同社の廃業は、ソフト業界の時代の変化を実感させる、悲しいトピックである。

山崎浩太郎 (やまざき・こうたろう)

演奏家の活動と録音をその生涯や同時代の社会状況において捉えなおし、歴史物語として説く「演奏史譚」を専門とする。クラシック音楽専門誌各誌や各種サイトに寄稿。朝日カルチャーセンター新宿教室にてクラシック音楽の講座を担当している。著書は『演奏史譚1954/55』『クラシック・ヒストリカル108』(アルファベータ)、片山杜秀さんとの『平成音楽史』(アルテスパブリッシング)ほか。1963年東京生まれ。